

一 闡提再考——「分別邪正品」³を中心に——

望 月 良 晃

一、はじめに

先には『大乘涅槃經の研究——教団史的考察——』なる著書
を出版したが、この中で、もっぱら一闡提について考察し、
その基本的性格として、イッチャンティカ icchantika とは
「利養」に貪著する者であると規定した。しかし一闡提の性
格にはまだまだ他の屬性があり、一筋縄ではいかない部分
があることを付け加えておいた。

それに『涅槃經』は、四十巻からなる大部の經典で、經典
成立の各段階において新しい性格が附与せられてくるので、
一概に他の大乘、あるいは他の菩薩乗と言っても、いわゆる
「正体」がはっきりしないのである。そこでここでは『六卷
泥洹經』で言う「分別邪正品」の所説を中心に、教団史的な
考察を試みようとするものである。それと云うのも、この章
には「調達」すなわち提婆達多の名が挙げられ、魔説を唱え
るのは、「魔の眷屬」つまり当時の「提婆達多の教団」³では

なかったかと考えられるからである。それに『大乘涅槃經』
で説く「仏性」というものが、いかにして開顯せられてくる
かという経緯をこの經は如実に伝えていることに着目し、併
せて、悟りを得ないのに得ていると自称する「過人法」³につ
いてもふれて、この章における一闡提の性格に関して教団史
的解明をめざしたいと思うものである。

二、魔説とは提婆達多の教団の所説か

分別邪正品とは、文字通り魔説と正説とを分別する章の意
である。經には、

「我、般涅槃七百歳の後、是の魔波旬、漸く当に我が正法
を破壊すべし」と予言せられ、この時代に魔波旬が次のよう
な魔説を唱えるというのである。それらを今、要約して挙げ
てみると、

- (1) 仏は昔、兜率天上より迦毗羅城の淨飯王の宮殿に來下し、父
母の愛欲和合によりて生を受けたのであって、愛欲はよらずし

て生ると言うならば、そんな道理はあり得ない。人間の法と同じであつて、生れて諸天、世人、阿修羅等の大衆に恭敬せられるのも種々苦行して頭目・髓腦・国城・妻子を布施したので仏となることができた。というような言を作すものがあればこれは魔の所説であると記され、それに対して、「父母の愛欲和合によつて生れたのは、衆生を化度せんがために世間に随順して方便示現をなしたのである」と仏説は主張するのである。

(2) 仏が生れた時、十方において各々に行くこと七歩せりとは信ずべからざることである。

(3) 仏が生長して、父王は人を従えて天祠に詣でしめたところ、諸天悉く下りて礼敬したと言うが、天は先に出で、仏は後に生れ来つたのであつてどうして諸天が仏を礼敬することなどあり得よう。

(4) 仏が太子であつた時、深宮にあつて、多くの姪女と五欲の娛しみをなして歓悦受樂した。

(5) 仏が舍衛城の祇園精舎に在つた時、諸の比丘に奴婢・僕使・牛羊・象馬・驢騾・鶏猪・猫狗等の家畜、金・銀・瑠璃・真珠・頗梨・車磑・馬瑙・珊瑚・琥珀・珂貝・璧玉等の宝、銅鉄の釜鍔・大小の銅盤、所須の物を受畜することを許し、耕田種植、販賣市易、穀米を積聚する等の衆事を、世間を哀慙する大慈の故に、これらを蓄ふことを聴したまへり。と言うものあらば、是の如き経律は悉く魔説であるとして仏の経律の項目を細部にわたり詳しくあげるのである。

(6) 仏は諸天の廟に入つて諸の天人を調伏すること能わず、また外道の邪論に入りその威儀・文章・技芸を知ること能わず、僕使の争いを和合する能わず、國王・大臣・男女等の諸の大衆に恭敬せられず、又諸衆を和合することを知らず。亦、人の僕使、男女、菓樹、若しくは王、大臣と爲るを現すること能わず等々と言つて魔は事々に仏の経律に対して批難し攻撃する。しかし、仏の立場は、あくまで「一切衆生を濟度せんが爲の故に善く是の如き種々の方便を行じて世法に随順する」と反論を加えて仏の正説を主張するのである。

さて、次に六卷本の文によると、

(7) 我が経律は、世尊の所説にして、是れ罪、是れ惡、是れ輕、是れ重、是れ範罪、是れ性罪爲りと言う。

我が説く戒律は是れ真実と爲し、汝が説くところは虚と爲す。寧ぞ我が説を捨てて、汝が説を取るや。汝、此の律を世俗論と謂う耶。

我が此の経律は、如來の所説にして、九部の契經、已に印封し竟る。九部印中に、我未だ曾つて聞かざるところの方等經の一句一字、片言の音有り。如來の説經に十部有り耶。方等經は、其の部、無量ならば、當に知るべし、皆、是れ調達の所作なり。一切義を壊して虚説を作る。方等經は意の妄造より出ずるものにして、我は信ぜざる所なりと言う。

と述べて、九部經の問題を取りあげ、虚説の方等經を否定している。因みにこの件りは、我と汝、あるいは我等と汝等と

いう語を以て言葉はげしく対立の姿勢を示すことにも注意すべきである。

この部分は、四十卷本曇無讖訳にも次のように書かれている。

「末だ曾て十部の經名有るを聞かず。若し其れ有らば、當に知るべし、必定、調達が所作なり、調達は惡人なり。善法を滅するを以て方等經典を造れり、我等是の如き等の經を信ぜず、是れ魔の所説なり」と、はっきり提婆達多の名をあげて、彼等が魔説を唱えていることを述べるのである。ことに、先に挙げた項目の中には、釈尊に対する提婆達多側の批難が、釈尊の伝説に対する個人的な怨念によって貫かれており、提婆達多の教団の具体的な主張を表わしたものを読みとることが出来る。周知の如く、提婆達多の教団に関する記事としては、法頭の『仏国記』や玄奘の『大唐西域記』の記録があげられるのみで具体的な記事としては見当たらない如くであるが、この「分別邪正品」の記述は、「調達」の名をはっきりとあげているだけに、仏説に対する魔説を説く「魔の眷属」とは、提婆達多の教団であつたと考えられるのである。

このように魔説を説く者は、我が法教を亂し、如来の方等契經を誹謗するものである。そして、当來の世には惡比丘あつて、夫々に經律ありと言うが、これらはみな邪説の經律である。如来が別に此の摩訶衍の方等大經を説くことを了知し

て、それに対し信仰心をいだき、戒律において邪見に執着せず、不淨の威儀を悉く捨離する。そして「如来は衆生を度せんが爲の故に方等經を説く」と知る者のみが我が弟子であり、菩薩である、と述べて正邪の分別を強調するのである。

又、「如来は無量功德に成就せられざれば無常變易して、苦・空・無我を説き、今已にして涅槃に入つた」と魔説は説くのに對し、「如来の正覺は、思議すべからず、無量無數の功德に成就せられて、仏世尊となりたまう。これ常住の法にして變易の法に非らず」と言うのが正説であると主張している。

三、仏性はいかにして開顯せらるるか

さて次に、波羅夷罪の一つである妄説得上人法戒（上人法uttarimanussadharmaとも言う）とは、未だ悟りを得ざるを得たりと稱することである。「過人法」と関連して仏性の開顯の経緯を記述していることである。この辺りの記述については『六卷泥洹經』の記述が明解であつて、簡にして要を得ているように思われるので、この經の記するところによると次のように説かれる。

一比丘有りて（空閑処に住し）、少欲知足にして、又、多知識なり。若し王、大臣及び余の世人見て、皆、恭敬して偈頌を説きて、彼の比丘の種種の功德を讃じ（是れ尊者なり、此の身を捨て

已りて、当に仏道を成ずべし」と言わば、比丘、聞き已りて便ち是の言を作す。へ汝等、未だ果を得ざる人に於いて道果を以って讃歎すること莫かれ、是れ多欲名字は、仏の許さざる所なり。汝等、默然たれ。形寿を尽して我が為に薬法の人を多欲名字と作すこと莫れ。まだ道果を得ざるを、我自ら之を知る。而して彼の国王及び諸の大臣、比丘に語りて言わく。へ今、汝、尊者よ、便ち是れ仏為り、世を挙げて悉く聞く。皆、汝に従いて、律・經・記論を学ばん。当に知るべし、彼の王、及び諸の大臣、偶頌もて功德を讃歎すること無量なり。然るに、彼の比丘は梵行を修持し、違犯する所なく、不度（波羅夷）と為すに非ず、自ら過人法を得ると称するを犯さず。

と書かれ、先に『如来藏經』に、「一切衆生皆仏性有り」と広説するが、「ある比丘有りて、無量億の煩惱を悉く除滅し已れば、仏、便ち明顯す。一闍提は除く。」と叙述されている。

この比丘に対して、国王や諸の大臣が尋ねる。すなわち、「汝、当に作仏すべきや、作仏せざるや。汝等の身中に皆、仏性有るや」と問うと、「我、当に作仏を得已るやいなやを知らず。然るに、我が身中に実に仏性有り」と答えている。そこで再び比丘に次の如く語る。「汝、今、一闍提の輩と作る莫れ、而して自らへ我当に作仏すべし」と計数せよ。比丘「爾り」と言う。「但、我が身中に実に仏性有り」と答え

ているのである。

以上の記述をまとめてみると、ある比丘が阿蘭若に住し、小欲知足、持戒清淨に身を持して無量の煩惱を修行によって断滅していく。それを見て国王、大臣はじめ世人が尊者はすでに仏に成っていると言う。すると、その比丘は、言うてくれるな、それを言えば「過人法」になって波羅夷罪を犯すことになる。と言って、仏の許さざる「多欲名字」、（多欲とは、文字通り欲望が多く、名字とは、名前だけと言う意味で、自ら僭称すること）すなわち一闍提を作さずに修行を続けていく。時に国王及び大臣達は比丘に更に尋ねる、「汝は作仏したのか、しないのか。仏性はあるのか、ないのか」と言う。「自分は仏になったかならないかは定かでないが、我が身中に実に仏性有り」と実感するところを答えているのである。法顯訳には「爾り」「但、我が身中に実に仏性有り」ということばは、決して過人法の罪にはならないとして、ここに初めて、仏性が明顯せてれてくる過程が如実に記述されていると思われる。

さらにここで注意すべきは、「多欲名字」と表現された、文字通り、利養に貪著する一闍提が排除されていることである。四十巻本には、さらに「大徳、如し其れ一闍提を作さずば、必ず成ずること疑い無し」と言われ一闍提なることが成仏の支障になっていることがわかるのである。

四、仏性開顯と諸戒律

又、魔説は、次のようなことを主張するという。すなわち、四波羅夷、十三僧殘、二不定法、三十捨墮、^⑩九十一墮、四懺悔法、衆多學法、七滅諍、偷蘭遮、五逆罪及び一闍提等のすべての罪は有ることなく、如来は人に恐怖せしめるためにこれらの戒律を説くのみで、如来の在世にも比丘の淫欲を習行して正解脱を得る者あり、また四重を犯し、あるいは五戒を犯し、一切不淨の律儀を行ずるも真正の解脱を得た者もあると言つて「凡そ所犯の戒に都て罪報無し」と吹聴するならば、是れは魔の經律である。と糾弾して、四波羅夷乃至微細の突吉羅等の罪を犯さば、まさに苦治すべし、若し禁戒を護持せざれば、どうして仏性を見ることができようかと説いて「禁戒」と「仏性」の因果關係を主張する。

「一切衆生、仏性有りと雖も、要らず持戒に因りて然して後に乃ち見る。仏性見るに因りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得るなり。九部經の中に、方等經無し、是の故に仏性有りと説かず。經に説かずと雖も、當に知るべし、實に有り」。

と宣言し、「如来は大乗大智海の中に於て仏性有りと説く」のであつて、この境界は、諸仏の知る所で、声聞、緣覺の及ぶ所に非ず、如来の甚深秘密藏であると宣説している。

本来、仏性有りと雖も、持戒清淨にして無量煩惱を断滅す

る修道によつて仏性は開顯せられることを強調するのである。

従つて、若し説きて、「我は已に阿耨多羅三藐三菩提を成就せり。何を以つての故に、仏性有るを以つての故に。仏性有る者は必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。是の因縁を以つて、我は今已に菩提を成就することを得たり」と言うならば、是の人は波羅夷罪を犯す者であると言う。何故ならば、仏性有りと雖も、未だ無量煩惱を断滅する修道なくしては、仏性は未見というべきであるから、波羅夷罪のうちの大妄語戒すなわち過人法を説くことになるからである。しかし、次には「過人法」の問題について、正邪を明かすのである。

今、『六卷泥洹經』の文をあげると、

「利養の爲の故に、詔曲にして徐歩し乞食を現行す。愚癡にして戒を犯し、未だ道果を得ざるに、而も果を得たりと言いて人に向いて称説す。普く共に聞知して恭敬、承事す。転た貪著を増して供養を伺望す。法念を修せずして戒儀を示現し、人を悦ばす意を取る。我、是の輩を説いて自ら称説して過人法を得ると為す」。

比丘にして利養のための故に、飲食の供養を得るために、空無なる過人法を故らに妄語して説き、在家の人達に恭敬せらるる者を過人法に墮する惡比丘と為すのである。それに対して、「正法を護持するが故に、利養を求め名声に貪著する

も空閑処に住して衆生を開道し、如来所説の経律を説き、仏性有るを説いて無量億の諸の煩惱結を断ずべしと勸説する者は「過人法」の罪に墮きないと説くのである。この經の立場は、正法護持のためならば、たとえ利養を求め名声に貪著しても犯戒も許され、過人法を説くことにはならないと主張するのである。

次には、大乘經中の偷蘭遮罪について詳しく記述し、それらの罪を犯す惡比丘に親近し供養し恭敬すべきでないとして述べ、沙門法について説くのである。ことに、姪欲を生ぜば疾く捨離すべきことを嚴戒している。又、種々の苦行、衆生を殺害して方道呪術し、珂具象牙を以って革履と為したり、種子を儲蓄し、草木壽命有り、摩訶稜伽を著くるを聴す等を説くのは魔説あるいは外道の説であると言ひ、「我は唯、五種の牛味、及び油、蜜等を食することを聴し、革履、幡奢耶衣を著くることを聴すのみ。四大に壽命あることなし」と説くと記すのである。最後に「善男子、魔説、仏説差別の相を、汝のために広宣分別せり」と述べて、この章を了るのである。

五、むすび

以上述べてきた如く、この章には提婆達多の教団と見られる魔の着属が、仏の正説に対して魔説を主張し、正法護持の

教団との間に深刻な対立、緊張関係がみられる。

又、この經では、仏性が真摯な修行者の心中に開顯せられてくる経緯を如実に述べており、あくまで持戒、修道によって無量の煩惱を破折することにより仏性が感得されると説くことは注意すべきである。本より仏性は衆生に内在するが、それは実践的に体得せられるものであることを強調している。

さらに仏性開顯の過程において、未だ悟りを得ざるに得たりとする「過人法」が問題にされており、また、「多欲名字」である一闍提なることが成仏の支障になるとされ、一闍提が排除されている。

従つて当初、一闍提と呼ばれた者達の中に、魔説を主張する提婆達多の教団も含まれていたと思われる。

- 1 四十卷本『大般涅槃經』如来性品第四の四(大正蔵十二卷、四〇二下〜四〇九上) 三十六卷本『大般涅槃經』邪正品第九(大正蔵十二卷、六四三中〜六四七上) 六卷本『泥洹經』分別邪正品第十(大正蔵十二卷、八八〇上〜八八二下)
- チベット語訳(北京版三十一卷99a6〜109b5)

- 2 『高僧法顯伝』の拘薩羅国(Kosala 現在のウッタール・プラデーシュ州)の条に「調達亦有衆在、常供養過去三仏、唯不供養釈迦文仏」(大正蔵五十一卷八六一頁上)と記録され、『大唐西域記』卷十の羯羅拏蘇伐剌那国(Kannasavata, 現在のヘル州の南部州境地域)の条に「別有三伽藍、不食乳酪、遵提婆達多遺訓也」(大正蔵五十一卷九二八上)との記録がある。

3 平川彰博士『原始仏教の研究』二四七頁、杉本卓洲博士「妄語戒と上人法」『仏教思想史論集』（成田山山仏教研究所、紀要第十一号）所収、一四一一一七〇頁。

4 『六卷泥洹經』にも「善男子、我、般泥洹七百歳後、如来の教法此れ從り漸く滅す。魔、比丘と作り正法を壊乱す。」チベット語訳にも「善男子よ、魔波旬（*maṛa-paṇḍya*）は、我が滅後七百年を経過した時に、我が教説を碎き破壊するであらう」（北京版・西蔵大蔵經三十一卷 p. 313a2）

5 『大般涅槃經集解』第卷十七に「弁十一種邪正事」としてまとめている。

第一 謂実生王宮也。

第二 不信四方各行七歩。

第三 謂仏在後生、応敬礼天、天前出故、不応礼仏也。

第四 謂実受五欲也。

第五 謂仏聴受八不淨物也。

第六 謂仏不能現入諸道、示衆伎能也。

第七 謂戒律一向皆重、又言無有大乗也。

第八 謂仏不為功德所成、故身無常也。

第九 謂実不犯、而言犯也。

第十 謂無一切戒也。

第十一 謂仏聴畜不如法物、及聴出家、亦為魔説也。

（大正蔵三十卷、四四四中—四四五中）

6 少くとも『集解』の第七の項目記事までの内容は、提婆達多の教団の主張と考えられる。

7 『六卷泥洹經』「分別邪正品第十」（大正蔵十二卷、八八一中—八八一下）

8 この部分のチベット語訳は、「未だ果を得ざる人（*puḍḡala*）

一闍提再考（望月）

に果を得たる如くに賞讃するなかれ。大欲（*che ḥdod pa*）は仏陀によつて非難せられ、默然は仏陀によつて賞讃される。私は命のあるかぎり、是の如き法に於いて満足すべきではない。すなわち、私は大欲に身を置くべきではない。私は未だ果を得ていないことを自ら知っている。」（北京版・西蔵大蔵經三十一卷 313b~313a2）

9 『大方等如来藏經』には、「一切衆生有如來藏」とある。（大正蔵十六卷四五七下）

10 平川彰博士「律蔵の研究」四五〇—四六二。「九十一墮」は化地部の「五分律」の教で、他はみな九十墮に数える。

11 拙著『大乗涅槃經の研究』第三章二節「正法護持の戒律」七二—七五頁。

12 儉蘭遮罪については平川彰博士『原始仏教の研究』二八三—二八九頁。

13 『集解』には、「若九十五種道皆聴出家、亦為乱律也」の解釈あり。（大正蔵三十卷・四四五中）

△キーワード▽ 調達、利養、過人法

（立正大学講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目（二）

縁起の滅とさとりの滅 森章司（東洋大学） 死苦について
関稔（駒沢大学北海道教養部） *puṇḍarīti*, '50' or '500':
湯山明（国際仏教学研究所） 漢訳般若経典における波羅蜜説
勝崎裕彦（大正大学） 『十住毘婆沙論』と初期大乘経典 八
力廣喜（北海道武蔵野女子短大） 瑜伽論を中心とした波羅蜜
説について 清水海隆（立正大学短大部）